

PM 式指導類型に対する児童と教師の認知 —学級モラルと学級イメージとの関係から—

藤原 正光*・大木 菜々子**

The Study of Cognitive Differences between Teachers and Students by PM-Teaching Styles in Elementary School According to School Morale, Class Atmosphere and Class Image

Masamitsu FUJIHARA, Nanako OHKI

要旨 教師の指導類型を PM 型, Pm 型, pM 型, pm 型の 4 類型に分けて, 学級モラル, 学級イメージ, 児童の教師評価と教師の自己評価との関係について検討した. 首都圏の小学校 5, 6 年生 9 学級の児童 248 名と担任教師 9 名とを調査対象とした.

教師の自己評価は児童の教師評価より高いことが示された. しかし, PM 型の学級では, 学級モラル, 学級イメージが最も高く, 児童の教師評価は高いが, 教師の自己評価とのズレはほとんど認められなかった. Pm 型では, 学級モラル, 学級イメージが最も低いが, 教師の自己評価は高く, 児童との認知のズレが有意に認められた. pM 型では, 学級モラルは相対的に高いが (2 番目), 教師の自己評価は最も低いことが特徴であった. pm 型には, 児童の教師評価と教師の自己評価に最も大きなズレが認められた.

因子分析の結果, 学級モラルには「気持」と「行動」の 2 つの因子が, 学級イメージには「創造的活動性」と「静的活動性」と「いごち」と「男女」の 4 因子が抽出された. PM 型では, すべての因子で最も望ましい結果が示された.

キーワード: PM 式指導類型 学級モラル 学級イメージ 児童の教師評価 教師の自己評価

はじめに (問題と目的)

学級の中で児童や生徒は, 教師や仲間の子どもたちとの相互の影響過程を通して発達する. 小学校では多くの場合学級担任制であるため, 担任教師が児童のさまざまな発達に影響を及ぼしている.

教師の児童に及ぼす影響の過程の研究は, リピットとホワイト (Lippitt, R. & White, R. 1943)¹⁾ の教師のリーダーシップに関する実験的研究に始まるとされる. この研究では, 教師のリーダーシップは「専制型リーダー」, 「民主型リーダー」, 「専制型リーダー」の 3 種類の教師のもとで発揮される指導性であると定義し, 予め 3 種類の訓練

を行い, それぞれのリーダーシップのもとで作品の作業量, 作品の質, 休み時間の子どもたちの行動 (動機づけの高さ) を比較した. 結果は, 民主型リーダーの子どもたちは, 作業量に関しては専制型リーダーの子どもたちに劣るが, 作品の質は独創的であり, 作業に対する動機付けは高く, 多くの子どもたちが, 休み時間になっても作品作りを続けていた.

わが国では, 三隅二不二の PM 理論 (1965)²⁾ が発表されて以降, 1970 年代の後半から学級集団における教師のリーダーシップの研究が急増してきた.

PM 理論とは集団の機能を示す概念であり, P は Performance (集団の目標達成機能), M は Maintenance (集団維持機能) を意味している. P 機能と M 機能を 2 つの次元とし, その強さを 2

*ふじはら まさみつ 文教大学教育学部心理教育課程

**おおき ななこ 佐倉市立佐倉東小学校

分割（強い：大文字，弱い：小文字）し，Pm型，Pm型，pM型，pm型の4つに分類して教師の指導類型としているのがPM式指導類型である。

佐藤静一・篠原弘章（1976）³⁾は，教師のP機能とM機能を測定する質問項目を作成し，小学4，5，6年生に担任教師を5段階で評定させている。結果は，教師のM機能要因の規定力がP機能より強いこと，そして，この2つの機能が相乗的に学級づくりに影響すると述べている。紅谷博美（1976）⁴⁾は，小学6年生5学級を対象に調査研究した。学校への関心，級友との関係，学習意欲ではPM型とpM型が最も望ましく，次いでpm型で，Pm型が最も低く，学業成績ではpm型が最も低い結果であった。教師のM機能を高く評価する学級が望ましいとする結果は，佐藤ら（1976）³⁾の結果と一致するものであり，小学校段階の子どもの指導にとって不可欠な要素であるといえる。

松山安雄・倉智佐一（1964）⁵⁾は，スクール・モラル（school morale）の概念を用いて児童・生徒の学級適応診断検査（SMT：School Morale Test）を作成した。ここでは，モラルの概念を，「集団状況における成員間の融合的結合意識を基礎とした，ある目標に集団として指向する成員の意欲的・積極的な態度ないしは行動である」と規定している。そして，スクール・モラルとは，「学校の集団生活ないし諸活動に対する帰属度，満足度，依存度などを要因とする児童・生徒の個人的主観的な心理状態である」とし，それは，学校への適応を示すものと考えている。その後，このテストを利用したいくつかの研究は，SMT各項目と学業成績，学級内の社会的地位との関係を報告している。

河村茂雄・田上不二夫（1997）⁶⁾は，児童のスクール・モラルを学級適応の指標と考え，教師の指導行動に焦点をあて，児童の認知する教師のPM式指導類型とスクール・モラルとの関係を都内の105学級の児童を対象に調査研究を行った。結果は，P機能とM機能を強く認識している児

童は，教師の指導類型に関係なくスクール・モラルが高いこと，PM型指導類型の学級は児童のスクール・モラルも高く，児童間でのバラツキが少ないことが示された。また，不登校や問題行動が起こる可能性の高い学級では，児童のスクール・モラルも低いことが予想されると述べている。

佐藤静一（1971）⁷⁾，佐藤ら（1976）³⁾は，オズグッド（Osgood et al., 1957）⁸⁾のセマンティック・ディフェレンシャル法（semantic differential method）を，学級の雰囲気測定できる形容詞や言葉に修正し，「私のクラス」に対して児童一人ひとりが抱いているイメージを直感的にとらえようとしている。学級の雰囲気に関して因子分析が行われ，学級・学習活動に対する「参加的雰囲気」の因子，「親和的雰囲気」の因子，「男女融和」の因子，「おとなしさ」の因子の4因子を抽出している。

近年，担任教師と児童との「認知的ズレ」の大きさが，学級の荒れ（学級崩壊），いじめ，不登校，教師の精神的不適応の問題と関連づけて論じられている。

本研究では，教師のPM式指導類型に再び焦点を当て，学級モラルと学級のイメージとを測度として児童と担任教師の認知のズレを検討することを主な目的としている。具体的には次の作業仮説を検討する。

- 1) PM型指導類型の児童を，学級モラル，学級イメージを測度として，他の指導類型（Pm型，pM型，pm型）の児童と比較する。
- 2) 児童の教師評価と教師の自己評価のズレを，PM式指導類型と関連づけて考察する。

方 法

調査対象：千葉県内および都内の小学校の9学級（5年生5学級，6年生4学級）の児童228名であり，担任教師は9名（男性5名，女性4名）であった。

調査内容と手続き：児童と担任教師それぞれに対して以下の調査を実施した。調査方法は、上記の9学級の担任教師に児童用の調査用紙と教師用の調査用紙を渡し、記入方法を詳しく説明した後で担任教師に調査の実施をお願いし、後日回収する方法をとった。実施した調査項目の内容は以下に示すとおりである。

1) 児童の教師評価（18項目）：三隅ら（1977）⁹⁾の研究からP機能とM機能を示す項目を参考に作成した。（表1参照）質問項目は、P機能を示す9項目とM機能を示す9項目、計18項目であった。回答方法は、非常にある（5）、かなりある（4）、ややある（3）、あまりない（2）、まったくない（1）の5段階評定であった。

2) 学級モラル（6項目）：佐藤・篠原（1976）³⁾の「学級意識の測定」尺度から作成した。（表3参照）質問項目の内容は、①クラスで何かするときの協力の度合い、②クラス対抗試合での応援の度合い、③学級のきまりを遵守する度合い、④今

の学級を誇りに思う度合い、⑤自分の学級が誉められたとき嬉しく感じる度合い、⑥今の学級のクラス替えを想定したときの気持ちであり、5段階での評定を求めた。

3) 学級イメージ：佐藤・篠原（1976）³⁾の「わたしのクラス」イメージを、形容詞対および対となる短い言葉17項目で評定した。（表5参照）評定は、非常に・楽しい（7）～どちらでもない（4）～非常に・楽しくない（1）の7段階評定であった。

4) 教師の自己評価（18項目）：児童の教師評価項目（上述18項目）を教師の評定に合うように修正した尺度を用いて測定した。

調査期間：2006年11月

結果

1 児童の教師評価の因子分析とPM型指導類型の決定

表1 児童の教師評価の因子分析（主因子法 バリマックス回転）

	第1因子	第2因子	共通性
第2因子 P機能 ($\alpha = 0.79$)			
7) 細かな注意をする	-0.04	0.68	0.41
9) 授業中の厳しい指導	-0.01	0.68	0.41
1) 児童の掃除・日直の仕事の注意	-0.04	0.62	0.46
8) 宿題・持ち物についての注意	0.01	0.61	0.37
2) クラスの決まり・約束の注意	0.31	0.51	0.45
4) 勉強（予習・復習）の奨励	0.23	0.48	0.35
3) 宿題を出す	-0.08	0.47	0.30
5) 成績を比較し、勉強を励ます	0.04	0.47	0.33
6) 話し合いに意見をはさむ	0.22	0.28	0.19
第1因子 M機能 ($\alpha = 0.81$)			
13) 児童の気持ちを理解する	0.84	0.02	0.63
10) ほめる・勇気づける	0.73	0.22	0.54
11) 困っている時の相談	0.67	0.10	0.52
16) 児童と一緒に遊ぶ・話しかける	0.64	-0.11	0.43
15) 児童の言い分を聞く	0.54	0.16	0.36
18) 掲示物の内容や配置の注意	0.51	0.14	0.32
14) 気安く話しかけられる	0.43	-0.03	0.25
17) 授業中面白いことを言う	0.42	-0.09	0.32
12) 悪いこと・ケンカ等の話し合い	0.36	0.40	0.32
寄与率 (%)		18.51	16.41
因子間相関			0.21

表2 PM類型別児童の教師評価・学級モラル・学級イメージ・教師自己評価の平均得点

PM類型	児童数	児童の教師評価 (5段階評定)	学級モラル (5段階評定)	学級イメージ (7段階評定)	教師数	教師の自己評価 (5段階評定)
PM型	44名	3.76 (.49)	3.93 (.56)	5.19 (.72)	2名	3.72 (.24)
Pm型	82名	3.18 (.46)	3.21 (.64)	4.17 (.80)	3名	3.74 (.32)
pM型	49名	3.15 (.47)	3.52 (.70)	4.40 (.84)	2名	3.56 (.63)
pm型	53名	3.00 (.52)	3.33 (.61)	4.41 (.74)	2名	4.11 (.16)
合計	228名	3.24 (.55)	3.43 (.68)	4.46 (.85)	9名	3.78 (.36)

() 内は標準偏差

1) 児童の教師評価の因子分析

三隅ら(1977)⁹⁾が作成した教師のリーダーシップ行動測定尺度をもとに作成した本研究の児童の教師評価項目の妥当性・信頼性を検討するため、また、PM機能による指導類型を決定する目的で因子分析(主因子法 バリマックス回転)を実施した。(表1 参照)

因子分析の結果、2つの因子を抽出した。第1因子(9項目)を「M機能」の因子と命名した。クロンバックの α 係数は0.86であった。また、第2因子(9項目)を「P機能」の因子と命名した。 α 係数は0.79であり、2つの因子ともに項目間の信頼性は保証されているとした。

項目間の共通性は、項目6が0.19と低い値であったが、その他の項目のレンジは0.30～0.63であった。結果の分析は、項目6も含めておこなった。

2) PM指導類型の決定方法

9名の担任教師のPM指導類型を決定するため、児童の教師評価を各クラスのP機能得点とM機能得点に分けて算出し、それぞれの学級の平均得点を中央値(P機能: 3.63, M機能: 3.00)で2分割し、PM型・Pm型・pM型・pm型とした。

また、本研究の結果をまとめて表示する目的で、表2にPM類型別児童の教師評価・学級モラル・学級イメージ・教師の自己評価平均得点を作成した。

2 児童の教師評価

児童の教師評価をPM指導類型別に検討した。

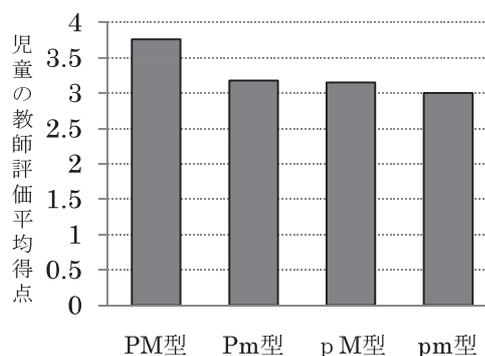


図1 類型別・児童の教師評価

児童の教師評価平均得点は、PM型(3.76)、Pm型(3.18)、pM型(3.15)、pm型(3.00)であり、Tukey法による一元配置の有意性検定の結果、PM型が他の指導類型に比べ有意に高い結果であった。(表2, 図1 参照)したがって、PM型指導類型の子どもたちは、担任教師を他の指導類型の子どもに比べ高く評価しているといえる。

Pm型、pM型、pm型指導類型間に有意差は認められなかった。

3 学級モラルの評価

1) 学級モラルの全体的評価

学級モラルの評価をPM指導類型別に検討した。学級モラル平均得点は、高い順にPM型(3.93)、pM型(3.52)、pm型(3.33)、Pm型(3.21)であり、Tukey法による一元配置の有意性検定の結果、PM型は他の類型に比べ有意に高く($p < .01$)、pM型はPm型に比べ有意に高い($p < .025$)得点であった。(図2 参照)

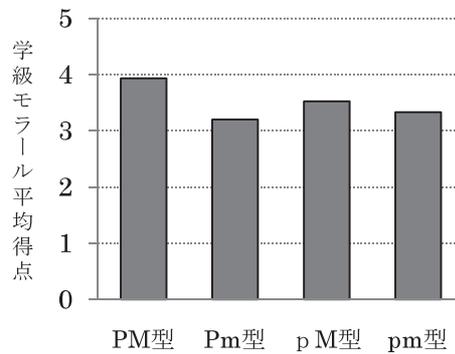


図2 類型別・学級モラル

表3 学級モラルの因子分析（主因子法 バリマックス回転）

	第1因子	第2因子	共通性
第2因子 行動の因子 $\alpha = 0.60$			
3) 学級で決めごとの遵守の度合	0.19	0.67	0.29
1) 学級活動への協力	0.18	0.64	0.28
2) 学級対抗スポーツ大会へ参加	0.17	0.40	0.15
第1因子 気持の因子 $\alpha = 0.73$			
4) 今の学級を誇りに思う度合	0.84	0.32	0.50
6) 学級替えを想定した時の態度	0.63	0.12	0.35
5) 学級が誉められた時の嬉しさ	0.48	0.32	0.29
寄与率 (%)	24.39	20.59	
因子間相関		0.41	

表4 類型別・学級モラルの平均得点（5段階評定）

	第1因子（気持）		第2因子（行動）	
	度数	平均値（標準偏差）	度数	平均値（標準偏差）
PM型	44	3.86 (.60)	44	4.00 (.76)
Pm型	90	3.30 (.69)	91	3.12 (.93)
pM型	52	3.60 (.69)	52	3.44 (.89)
pm型	61	3.28 (.71)	61	3.38 (.78)
合計	247	3.46 (.71)	248	3.41 (.90)

2) 学級モラル評価の因子分析からの分析

因子分析の結果、2つの因子を抽出した。第1因子（3項目）を「気持」の因子と命名した。クロンバックの α 係数は0.73であった。また、第2因子（3項目）を「行動」の因子と命名した。 α 係数は0.60であった。質問項目2の共通性が0.15と低い値であったが、そのまま分析の対象とした。

次に、PM 指導類型別に学級モラルの平均得

点を求め分析の対象とした。（表4 参照）

学級モラルの平均得点を指導類型別に検討すると、第1因子（気持）と第2因子（行動）との平均得点間に有意な得点差は認められなかった。

第1因子（気持）では、PM型（3.86）、pM型（3.60）、Pm型（3.30）、pm型（3.28）であり、Tukey法による検定で、PM型 > Pm型・pm型の関係が有意（ $p < .01$ ）に示された。（表4 参照）

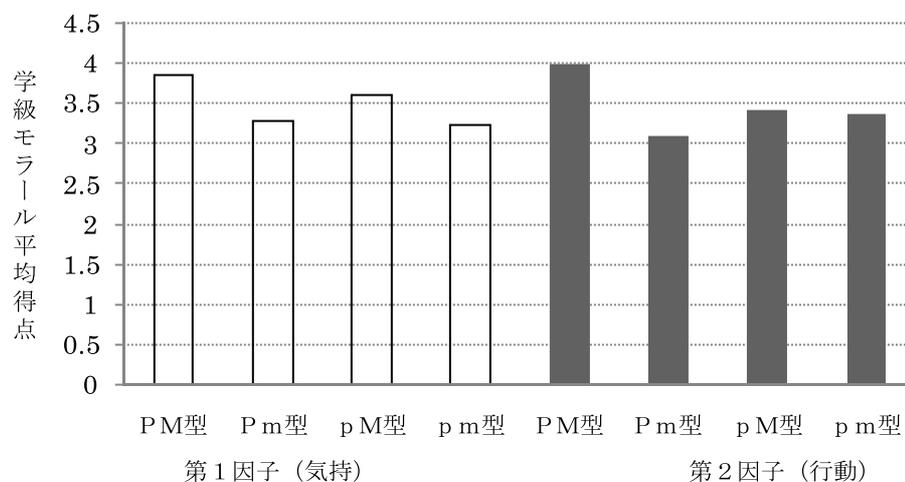


図3 因子・類型別・学級モラル得点

第2因子(行動)では、PM型(4.00)、pM型(3.44)、pm型(3.38)、Pm型(3.12)であり、Tukey法による検定で、PM型(4.00)が他の指導類型より有意($p < .01$)に高い平均得点であった。(表4 参照)

4 学級イメージの評価

1) 学級イメージの全体的評価

学級イメージの評価を指導類型別に検討した。学級イメージ平均得点は、高い順にPM型(5.19)、pm型(4.41)、pM型(4.40)、Pm型(4.17)であり、Tukey法による一元配置の有意性検定の結果、PM型は他の類型に比べ有意に高い($p < .01$)ことが示された。(表2、図4 参照)

2) 学級イメージの因子分析からの分析

因子分析の結果、4つの因子を抽出した。第1因子(8項目)を「創造的活動性」の因子と命名した。クロンバックの α 係数は0.86であった。また、第2因子(4項目)を「静的活動性」の因子と命名した。 α 係数は0.78であった。第3因子(3項目)を「いごち」の因子と命名した。 α 係数は0.81であった。第4因子(2項目)を「男女」の因子と命名した。 α 係数は0.91であった。質問項目10の共通性が0.26と低い値であったが、そのまま分析の対象とした。(表5 参照)

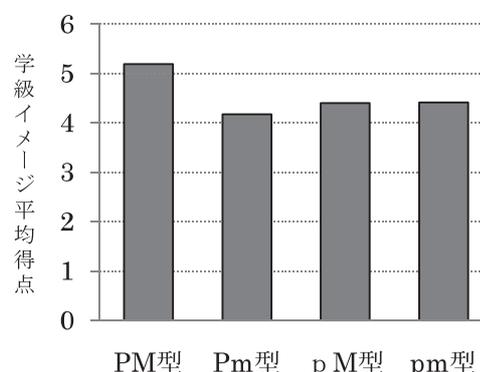


図4 因子・類型別学級のイメージ得点

次に、PM指導類型別・因子別に学級イメージの平均得点を求め分析の対象とした。(表6 参照)

第1因子(創造的活動性)では、平均得点の高い順にPM型(5.07)、pM型(4.38)、pm型(4.33)、Pm型(4.13)であり、Tukey法による検定で、PM型が他の指導類型より有意に高い得点であった。

第2因子(静的活動性)では、平均得点の高い順にPM型(4.35)、pm型(3.50)、Pm型(3.43)、pM型(3.43)であり、Tukey法による検定で、PM型が他の指導類型より有意に高い得点であった。

第3因子(いごち)では、平均得点の高い順

表5 学級イメージの因子分析（主因子法 バリマックス回転）

	第1因子	第1因子	第2因子	第2因子	共通性
第1因子 創造的活動性 $\alpha = 0.86$					
8) クラスが協力的である—でない	0.72				0.55
7) 規則・きまりを守る—守らない	0.67				0.55
9) けじめのある—だらしない	0.63				0.59
12) 勉強に熱心—勉強に不熱心	0.55				0.51
13) 何事も自分です—一人に頼る	0.52				0.47
6) クラスがまとまっている—いない	0.50				0.60
4) 進んで行動する—行動しない	0.46				0.43
10) 競争的である—競争的でない	0.41				0.26
第2因子 静的活動性 $\alpha = 0.78$					
15) クラスがおとなしい—乱暴である		0.76			0.51
14) クラスが静か—騒がしい		0.75			0.51
11) 掃除に熱心—掃除に不熱心		0.55			0.49
5) 落ち着いている—そわそわ		0.53			0.45
第3因子 いごち $\alpha = 0.81$					
1) クラスが楽しい—楽しくない			0.83		0.57
3) 明るいクラス—暗いクラス			0.70		0.49
2) 仲良しなクラス—仲が悪い			0.67		0.46
第4因子 男女 $\alpha = 0.91$					
16) 男女の仲がよい—仲が悪い				0.84	0.74
17) 男女が協力的—協力的でない				0.84	0.77
寄与率 (%)	18.64	14.87	13.57	10.03	
因子間相関		0.66	0.50	0.48	
			0.23	0.41	
				0.42	

表6 類型別・因子別・学級イメージの平均得点（7段階評定）

	第1因子（創造的活動性）			第2因子（静的活動性）			第3因子（いごち）			第4因子（男女）		
	度数	平均値	（標準偏差）	度数	平均値	（標準偏差）	度数	平均値	（標準偏差）	度数	平均値	（標準偏差）
PM型	43	5.07	(0.82)	43	4.35	(1.08)	44	6.33	(0.84)	44	5.31	(1.36)
Pm型	88	4.13	(0.84)	87	3.43	(1.02)	91	5.37	(1.16)	91	3.86	(1.40)
pM型	50	4.38	(0.90)	51	3.37	(1.10)	52	6.03	(0.90)	52	3.66	(1.52)
pm型	55	4.33	(0.89)	57	3.50	(1.13)	61	5.69	(1.00)	61	4.31	(1.42)
合計	236	4.41	(0.92)	238	3.61	(1.13)	248	5.76	(1.04)	248	4.19	(1.53)

にPM型（6.33）、pM型（6.03）、pm型（5.69）、Pm型（5.37）であり、Tukey法による検定では、PM型 > pm型・Pm型（ $p < .01$ ）、pM型 > Pm型（ $p < .01$ ）となる有意な関係が示された。

第4因子（男女）では、平均得点の高い順にPM型（5.31）、pm型（4.31）、Pm型（3.86）、pM

型（3.66）であり、Tukey法による検定で、PM型が他の指導類型より有意に高い（ $p < .01$ ）得点であった。

5 教師の自己評価と児童の教師評価

1) 教師の自己評価

児童の教師評価項目を教師に合うように語句修正した教師自己評価の平均得点は、高い順に pm 型 (4.11), Pm 型 (3.74), PM 型 (3.72), pM 型 (3.55) であった。サンプルとした教員数は 9 名と少ないため、回答数をもとに検定を実施した。例えば、PM 型では、2 名が 18 項目に答えたため 36 サンプルを基準とした。pm 型が他の指導類型より有意に高く (pm 型 > Pm 型, $t_{(88)} = 5.95$ $P < 0.001$), Pm 型 > pM 型 ($t_{(88)} = 1.79$ $0.05 < p < 0.10$) の傾向が認められた。(表 2, 図 5 参照)

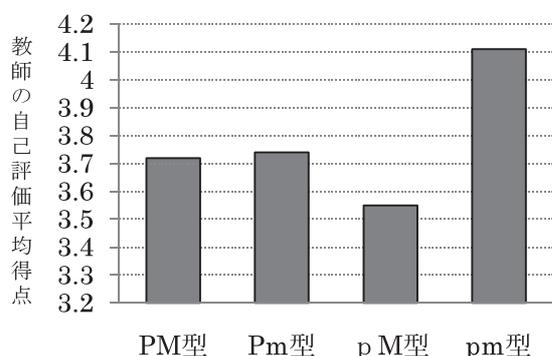


図5 類型別・教師の自己評価平均得点

pm 型の教師は、他の指導類型の教師に比べ自分を高く評価する傾向があり、逆に、pM 型の教師は自分を低く評価する傾向にあった。

2) 児童の教師評価と教師の自己評価の関係

児童の教師評価と教師の自己評価の関係を表 2, 図 6 に示した。指導類型別に平均評価得点を示すと、PM 型 (児童 3.76, 教師 3.72), Pm 型 (3.18, 3.74), pM 型 (3.15, 3.56), pm 型 (3.00, 4.11) であった。

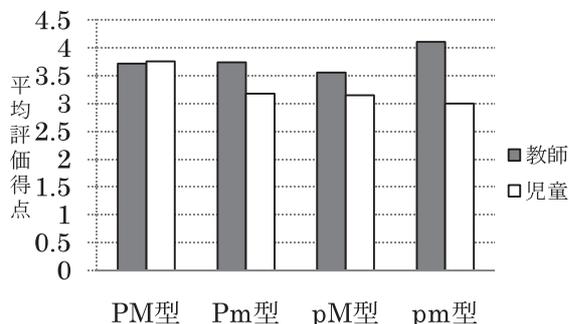


図6 教師の自己評価と児童の教師評価

PM 型を除くすべての指導類型で児童の教師評価と教師の自己評価に有意差が認められ、教師の自己評価の方が高かった。そのズレは、PM 型 (0.04), Pm 型 (-0.56), pM 型 (-0.41), pm 型 (-1.11) であった。

考 察

教師の指導類型を PM 型, Pm 型, pM 型, pm 型の 4 類型に分けて、学級モラル, 学級イメージ, 児童の教師評価と教師の自己評価との関連について検討した。

1) 学級モラル

従来の多くの研究では、学級モラルをスクール・モラルとして取り扱っている。本研究では、学級を中心に取り扱っているため「学級モラル」とした。

学級モラル全体の平均得点は、高い順に、PM 型, pM 型, pm 型, Pm 型であった。PM 指導類型の学級の児童は、他の指導類型の児童に比べ有意に高い得点を示していた。また、pM 型の得点は PM 型に次いで高く、学級モラルの形成には M 機能が強く影響していることが示された。

因子分析の結果、「気持」の因子と「行動」の因子が抽出された。これらの因子別に集計した得点も、PM 型に次いで pM 型が高かった。

したがって、PM 型や pM 型の学級の児童は、学級の活動に積極的に関わり、自分のクラスを誇りに思い、今のクラスの継続を願っている様子が伺える。

この結果は、佐藤ら (1976)³⁾ の結果をある程度支持するものであった。

大西佐一・松山安雄・他 (1967)¹⁰⁾ の学級適応診断検査 (SMT) の下位尺度 (学校への関心, 級友との関係, 学習への意欲, 教師への態度, テスト不安) と PM 式指導類型との関連については今後の課題とする。

2) 学級イメージ

学級イメージの評定結果を PM 指導類型別に検

討した。学級イメージ全体の平均得点は、高い順に、PM 型、pm 型、pM 型、Pm 型であり、PM 型が他の指導類型に比べ有意に高かった。

因子分析の結果、「創造的活動性」の因子、「静的活動性」の因子、「いごこち」の因子、「男女」の因子の4因子が抽出された。この結果は、佐藤(1971)⁷⁾の結果をほぼ支持するものであり、「創造的活動性」の因子は「参加的雰囲気」(佐藤)、「静的活動性」の因子は「おとなしさ」(佐藤)、「いごこち」の因子は「親和的雰囲気」(佐藤)、「男女」の因子は「男女融合」(佐藤)に対応するものと考えられる。

PM 型指導類型は、学級イメージを学習やスポーツや協力的な活動などの創造的活動面で、また、静かな落ち着いた静的な活動面でも、楽しい明るい居心地のよい、男女が仲良しな学級づくり等にポジティブに働いているといえよう。

pM 型指導類型は、PM 型ほど高くはないが、他の指導類型に比べ学級のイメージ作りにポジティブに働いている。それと対照的に、Pm 型はあまり効果的に作用していないとする結果であった。学級のイメージづくりにも、M 機能がより強く働いているようである。

3) 児童の教師評価と教師の自己評価との関連

教師自己評価の平均得点は、高い順に pm 型、Pm 型、PM 型、pM 型であり、pm 型が他の類型に比べて有意に高く、pM 型の教師が最も低く自己評定していた。

また、児童の教師評価と教師の自己評価とのズレは、pm 型が最も大きく、次いで、Pm 型、pM 型、PM 型の順であり、PM 型を除くすべての指導類型に有意差が認められた。

PM 型の指導類型の児童の教師の評定は相対的に高く、教師の自己評定との間に有意差が見られない結果は、三隅(1977)⁹⁾の知見から予想できるものである。つまり、PM 型の教師は、児童の学習場面や生活場面の仕事やきまりを厳しく指導する(P 機能)とともに、気軽に相談にのったり一緒に遊んだりほめたり勇気付けたりする心理的

な働きかけ(M 機能)を十分行っている。また、これらの行動を児童が正しく認知している。pM 型の教師は、相対的に自己を過少評価する傾向が伺える。

pm 型の教師は、自分の教師としての活動(学習面や生活面、心理的な働きかけ)を児童が認知する以上に高く評価している。この傾向は Pm 型の教師にも当てはまる。

【引用文献】

- 1) リピットとホワイト (Lippitt, R. & White, R.K. 1943) 小川一夫(編著)「学級経営の心理学」小川一夫 第7章学級の個性 171-196 1992
- 2) 三隅二不二・田崎敏明 組織体におけるリーダーシップの構造—機能に関する実証的研究 教育・社会心理学研究 5,1-13 1965
- 3) 佐藤静一・篠原弘章 学級担任のPM 式指導類型が学級意識及び学級雰囲気に及ぼす効果—数量化理論 第II類による検討— 教育心理学研究 24,4,235-246 1976
- 4) 紅谷博美 子供が認知した親及び教師の指導類型とスクール・モラル・情緒の安定・学業成績との関係 愛知県教育センター教育研究紀要 37,41-45 1976
- 5) 松山安雄・倉知佐一・西山 鴻 学校におけるスクール・モラルに関する研究(第2報) 大阪教育大学紀要 25,93-103 1976
- 6) 河村茂雄・田上不二夫 児童が認知する教師のPM 式指導類型とスクール・モラルとの関係についての考察 カウンセリング研究 30,2,121-129 1997
- 7) 佐藤静一 学級担任教師の指導型と学級雰囲気及び学級意識に関する実証的研究 日本教育心理学会第13回総会発表論文集 426-427 1971
- 8) オスグッドら (Osgood, C.E. 1957) 小川一夫(編著)「学級経営の心理学」小川一夫 第7章学級の個性 171-196 1992
- 9) 三隅二不二・吉崎静夫・篠原しのぶ 教師のリーダーシップ行動測定尺度の作成とその妥当性の研究 教育心理学研究 25,3,157-166 1977
- 10) 大西佐一・松山安雄・他 SMT・学級適応診断検査手引 日本文化科学社 1967

謝 辞

調査の実施にあたり、ご協力いただいた小学校の9学級の先生方及び児童の皆さまに記して感謝の意を表します。